

ある日の午後・・・

僕はコンビニの
帰り道で



幸運の変態

緒方ごう



見かけた男の子を



窓から庭が見える。
お風呂場も見える。



道路を挟んで
向かい側、
古い軒家に
引っ越してきたようだ。

自宅

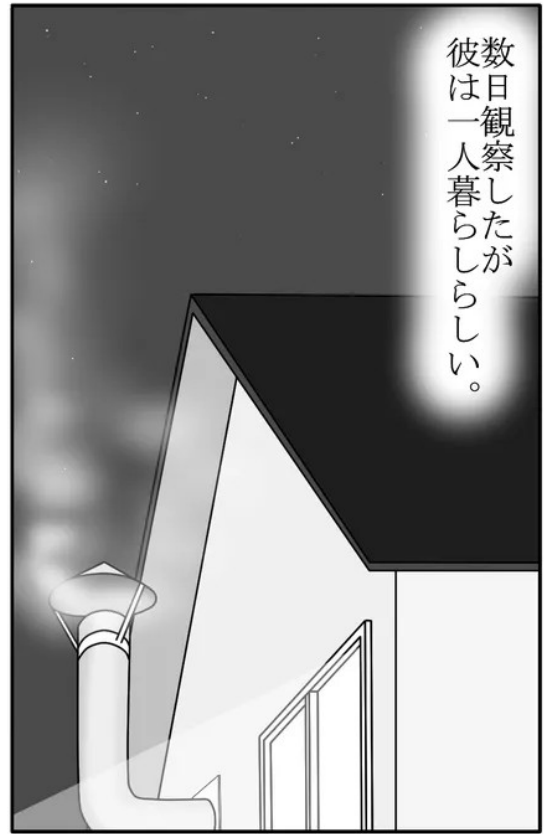
男の子宅



なんでも今日から
楽しんだか
しまりそうだな
予感があった。



規則正しく生活し、
決まった時間に
お風呂に入った。



数日観察したが
彼は一人暮らしらしい。



僕は決まった時間
にオナニーする
ようになった。

はあ
はあ
はあ



僕は幸せな日々を
過ごしていた。

ビュ
ブル
ブル
ブル
ブル

んふっ!
んふっ!

ビュ
ブル
ブル



パンツを膨らましなが
ら歩いている。

規則正しいオナニ
ー生活のせい
か、僕は先ほ
どから勃起が
治まらない。

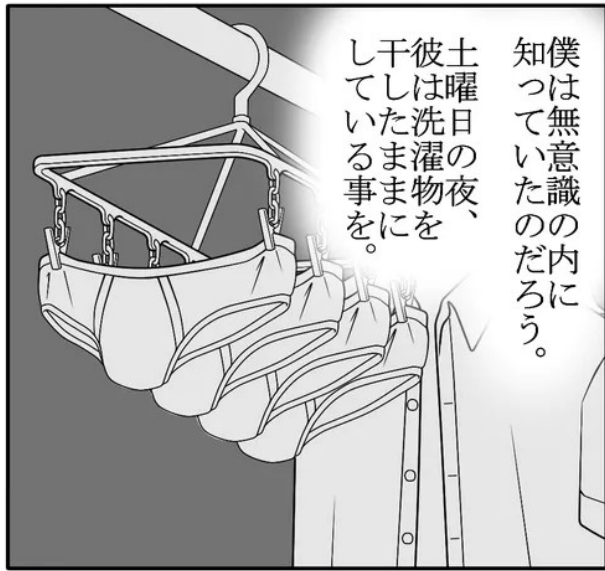
ブル
ブル

ブル
ブル

ブル
ブル



そんなある日、
帰りが遅くなっ
てしまった。
彼の入浴時間
はもう過ぎて
いる。



僕は無意識の内
知っていたのだら
う。
土曜日の夜、
彼は洗濯物を
干したままに
している事を。



今まで衣服に
興奮する事は無
かった。
ただ僕は彼の何
か知らを
欲していたのだら
う。



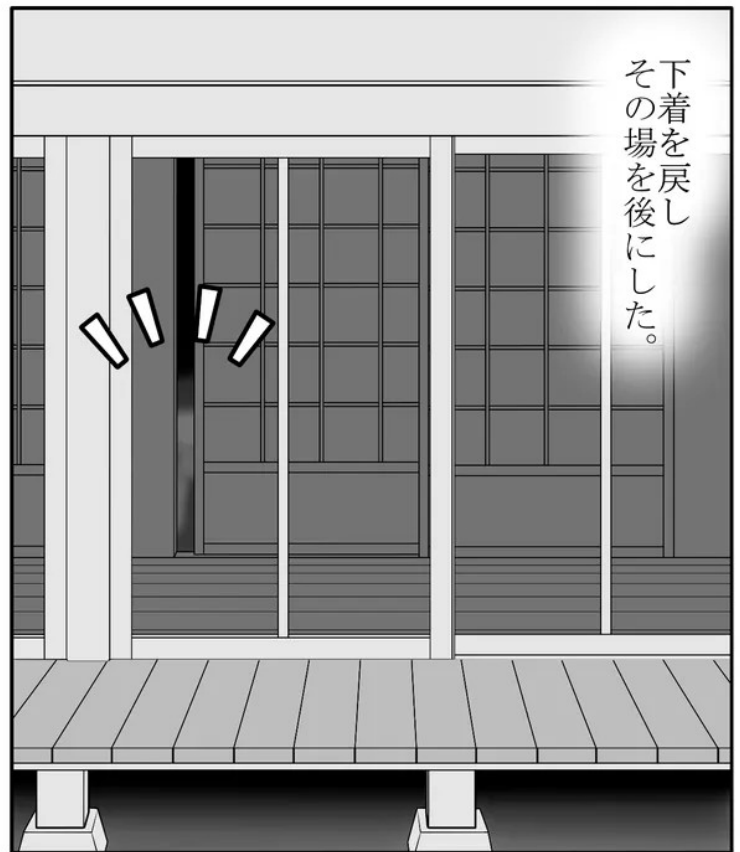
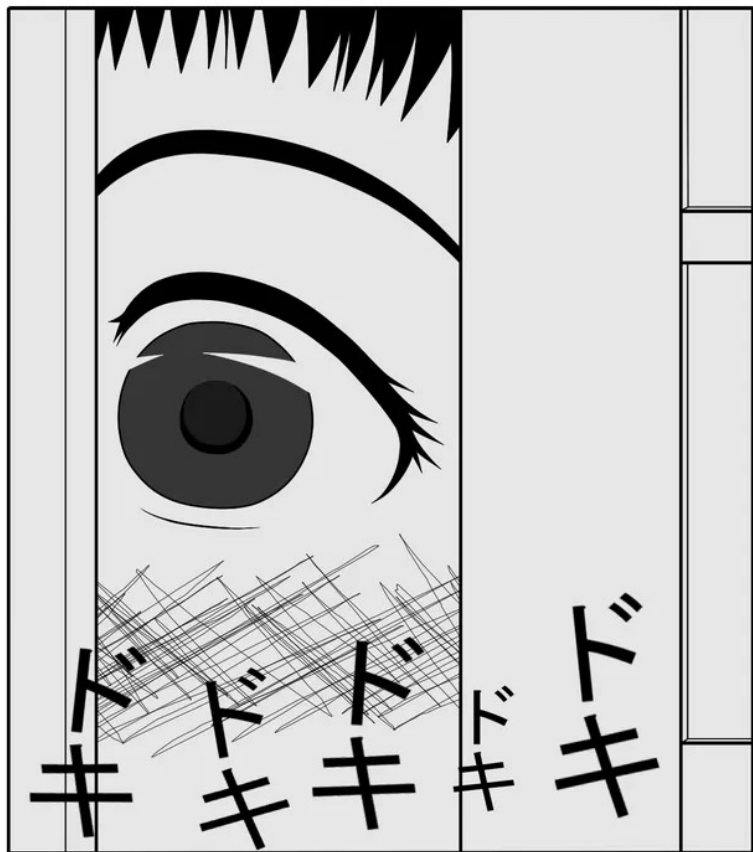
興奮は治まらないま
家に着きそうだった。
僕は何気に
彼の家を覗く。

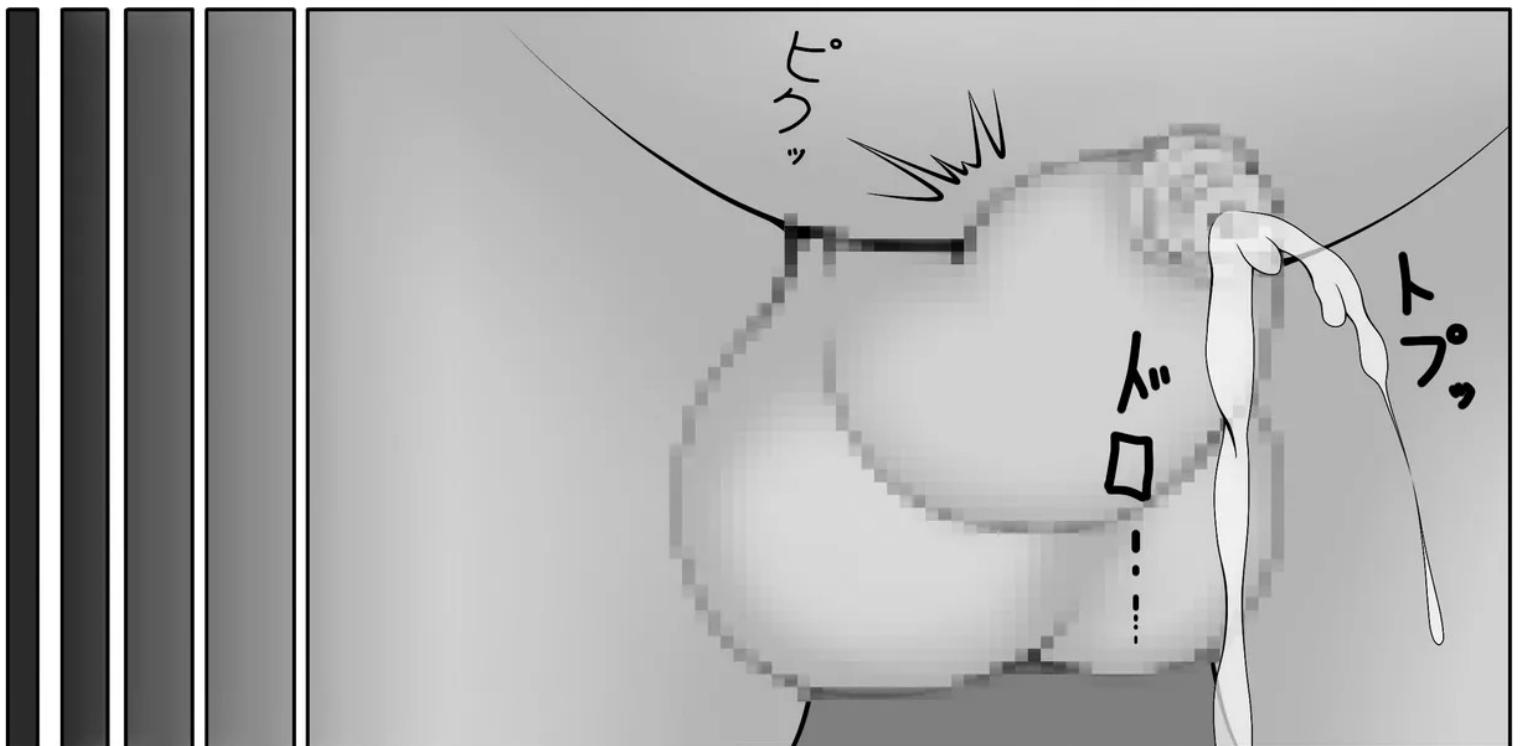


彼の下着を手にした僕は
高揚感に包まれ僕は
自然と笑みがこぼれた。

僕は我慢出来ずに
その場でオナニーを始めた。
彼のプライベートな空間で
彼の下着を犯した。







その日から、
毎週土曜日は、
彼の事を想いは
……

彼の庭で、
彼の下着を犯し……

彼の傍で
大量の精液を出した。

その行為は次第に
慣れて行き……



気が付けた。大胆な事を
してんた。

ん
ふ、
ん
ふ、
〜
〜

あの……

ビ
ク
ッ

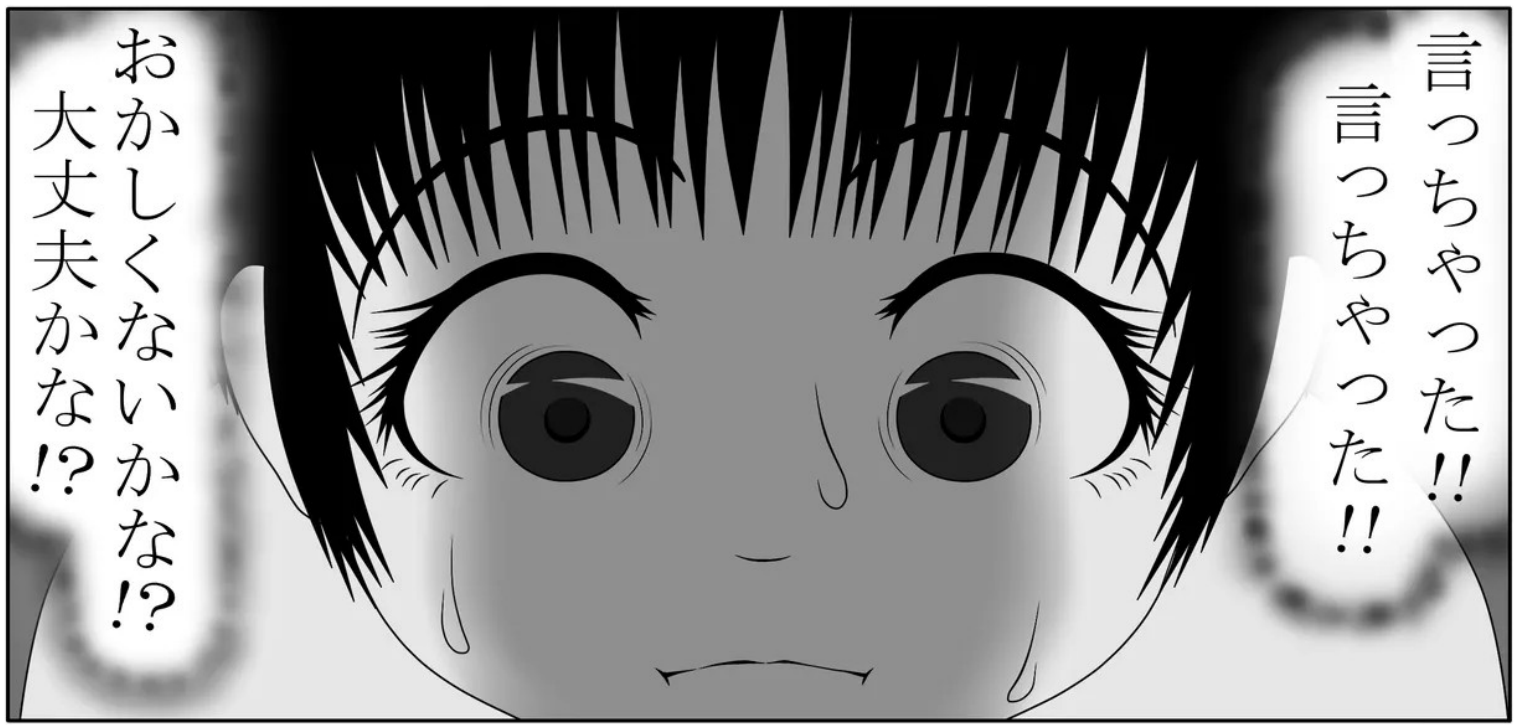
使ぼ
つてく
ださい
……

むに〜

グ
ッ

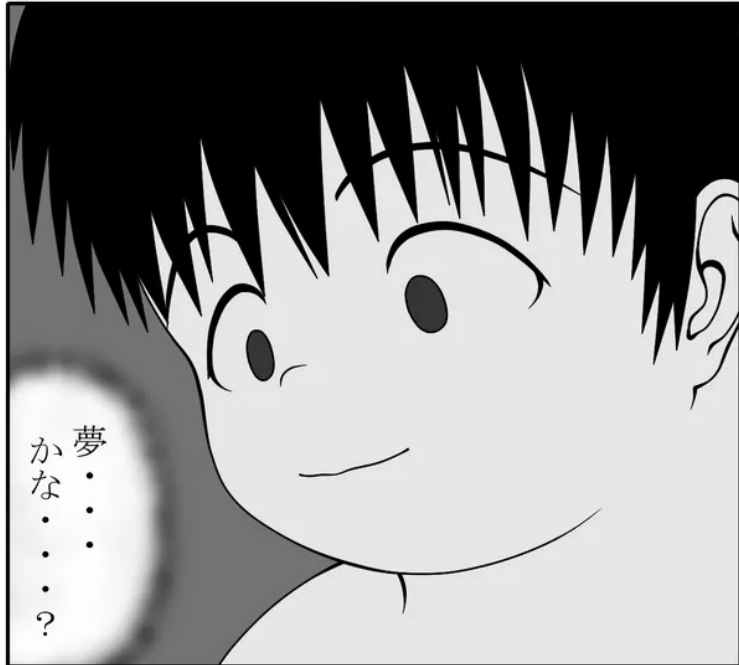
ク
イ





言っっちゃった!!
言っっちゃった!!

おかしくないかな!?
大丈夫かな!?



夢...
かな...?



どっちでもいいか...

もう止まらない...



ん!!

ズプッ



んはっ!

太いっ!

いきなり!

ずぶっ

ぐぼっ

んひっ!

奥まで!!

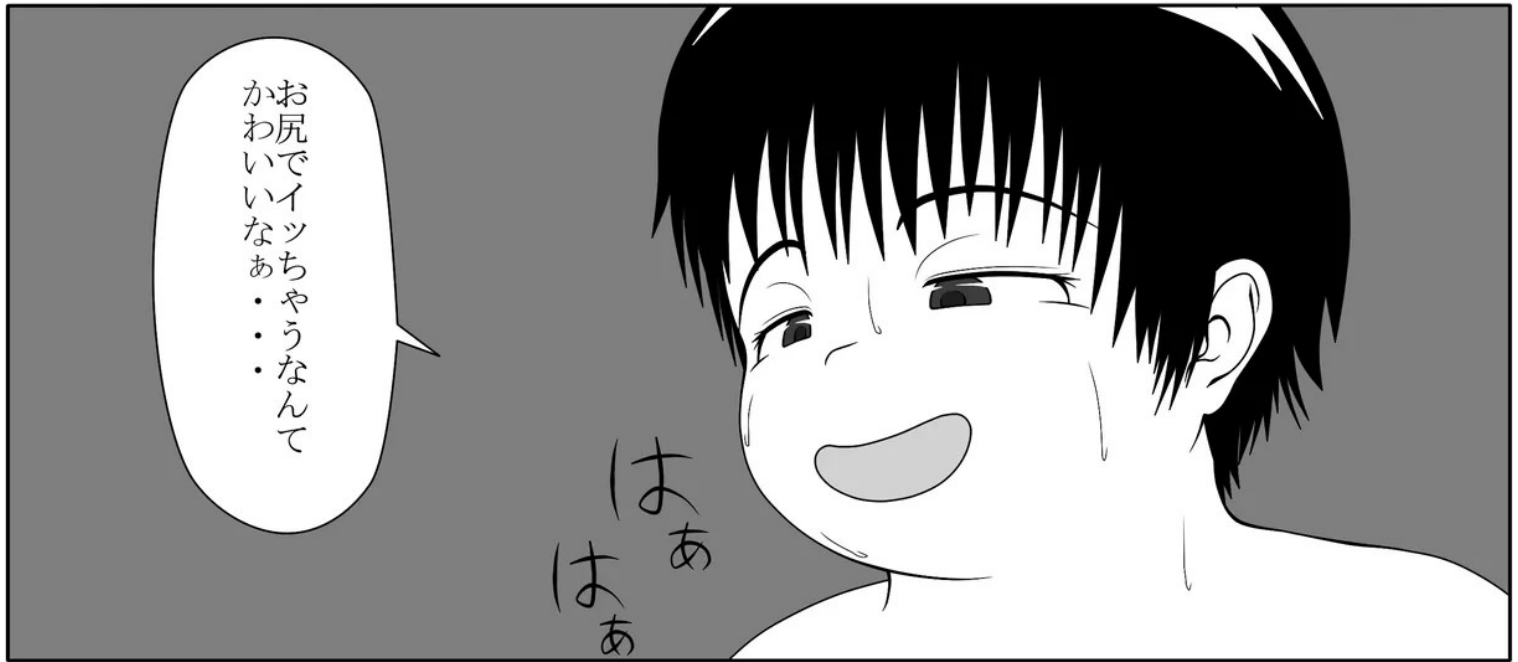
いくっ!!

ぬぼっ

びんっ



ああああああああああああああああああああ！



かわいい!!!



んひあ!

ずぽっ

ずぽっ

ピク
ピクン



あはあ
あああ
あああ
あああ
おしりいい
いぐうううお!

おおあ
あああ
あああ!!

え〜〜〜

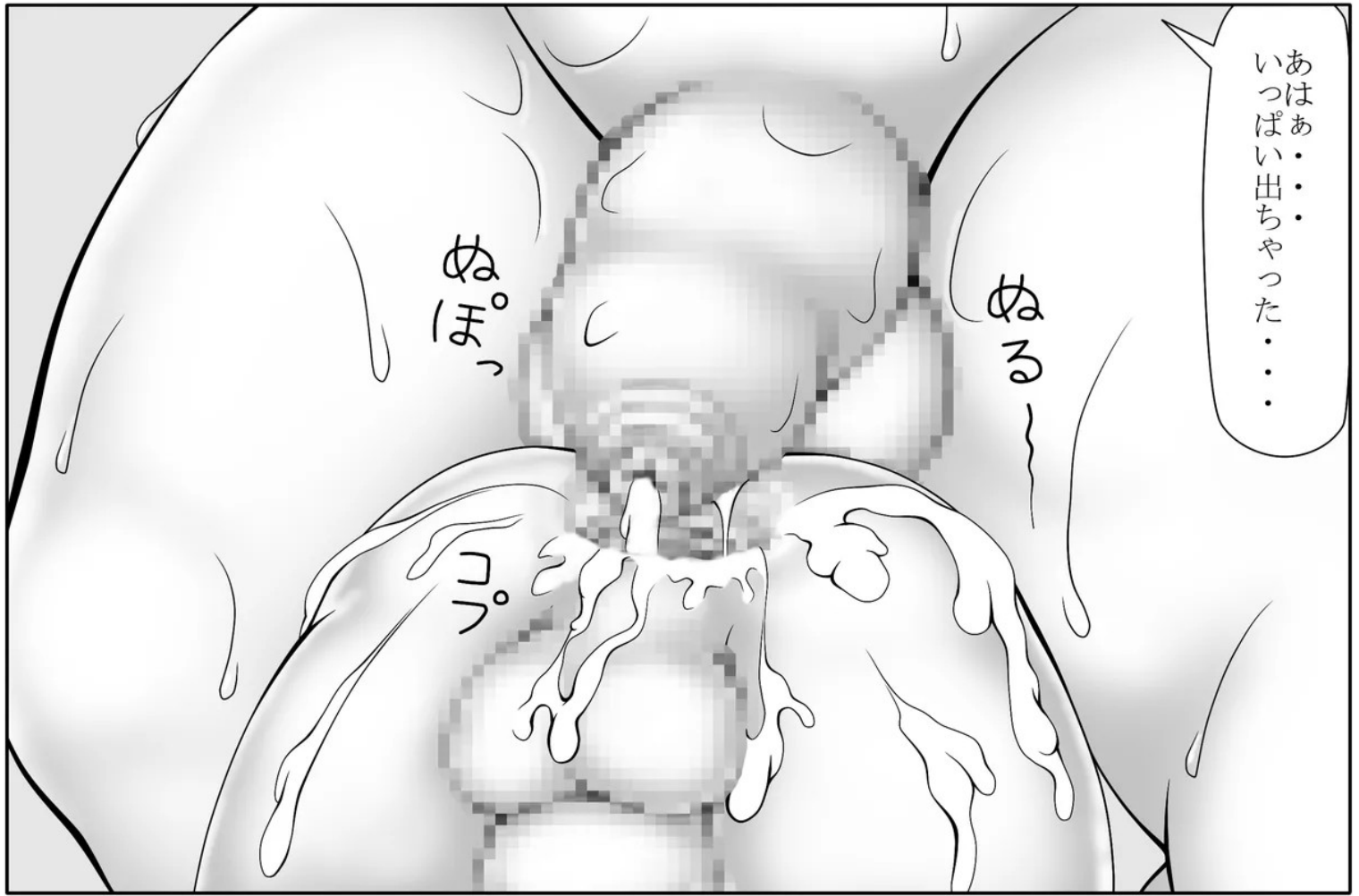
中田〜

男の子に...

〜

ハア ハア

ぬぷっ ぐちゅっ じゅぽっ ぐぽっ



あはあ...
いっぱい出ちゃった...

ぬぽっ

ぬるー

ジュッ



僕は幸せそうに
癡癡する彼を残し
家に帰った。

ひゅっ
ひゅっ

この出来事を
夢として処理を
また日常を過ごした。

一週間後・
縁側で僕を待つ彼を見た。
やっつと現実だと気付いた。

